



丹波 浪人

寄稿家披露

△橋崎敏雄君。明治二十四年東京郊外葛



飾の生れ、嚴父の郷里佐賀有明濱に育ち、大正四年東大英文科を卒業されたが、文科の生

活は君の生活に合致しなかつたものか、目的を變更して再び東大法学科に入學、大正九年英法科を卒業して中央大學教授と爲り、主として交通政策の講座を擔任し、昭和五年春歐洲に留學しハイデルベルヒや巴里伯林大學の講義を屢聽し、六年の暮に歸朝し矢張り中大に教鞭を執られてゐる。其の蘊蓄は、交通政策概論、空中交通論などに表

はれてゐる。

交通政策と言へば直に鐵道交通を聯想せしむるやうに言ひ難された程に、鐵道に重點を置いた時代は既に去つて、水陸空の三方面に於ける交通に關し改革創設すべき多くの問題が與えられてゐる現時の我國に於て、氏の如き篤學者を持つ學界は幸福と言はねばならぬ。陸上交通機關乃至は用具が殆ど行詰つてゐるかの感ある我が交通界打開の指針を示して貰ひたいものだ。

△宮本武之輔君。明治二十五年愛媛縣溫



泉郡與居島村の生れ、大正六年東大工科を出て八年内務技師と爲つて今も其の職に居る、

昭和三年鐵筋混凝土に關する論文を提出して工學博士の學位を得られた。先年我が土木學界に於て問題となつた彼の大河南津の補修工事を擔當して名を擧げ、今は港灣技術

の監督に従事してゐられる。

生れ故郷の與居島村は四國の一つの離れ島、汽車の上からあの島が宮本博士を生んだ島だと教へられた筆者は、宮本博士の顔付きに思ひ浮へて、昔、昔の大昔は海賊でも居た島だろう、と思はしむる程、宮本君は蠻的に見える、良く言へば男らしい顔の持主だ、今でこそ世間は煙突男と言つて騒ぐが、彼は高等學校時代にストライキをやつて煙突に上り墜落した。言はゞ日本の煙突男の嚆矢だとも言はれてゐる。夫れ程に勇敢な人だが、勉強することも亦人一倍、將來ある内務技師として矚目されてゐる。

△西川榮三君。明治二十六年、東京郊外



澁橋町柏木の産、大正八年東大理工科を卒業し、同一年内務技師と爲つて内務省土木試

験所に奉職し同所に於てアスファルト類の

試験に従事されてゐる。

純粹の江戸つ児だが至つて温厚な物優しい人だ。口善悪ない連中は憂鬱気分の人などと言ふが、筆者等と會談する時は晴やかな態度が見えて左様な氣分を發見する事が出来ない位だ。併しどちらかと言へば女性肌の人だ。音楽に興味を持つて居られるのも矢張り其勢の表はれであらう。長唄なども商賣人を驚かすと言はれてゐる。夜間散歩が好きだそうだが、靜かな墓地などを逍遙したとき大木の上に月などが出たら一滴の涙を落すか否かは保證の限りでない。



△青木楠男君。明治二十六年秋田市に生

れた人、大正七年

東大を出て八年内務技師となり、西川君と同じやうに内務省土木試験所

に奉職されてゐる。曾て有名な利根川の架橋工事を完成せしめ、内務省土木出張所に

は橋梁の技師か居ないと言ふ惡評を打破つた程の俊才である。

東北生れとは思はれない程言葉の明瞭な人、夫れに辯論家だから商切れの可い言葉で會談してゐると人をして朗かな感に打たしむる。曾て大藏省主税局長から横濱税關長に左遷され辭表を叩きつけ退官した青木得三氏の令弟であるだけに氣がある。趣味は撞球庭球と相當の手腕を持つてゐる、近頃は新橋や赤坂に通つてダンスを修業中だと聞くが、好男子は成るべく其の方に足を向けない方が安全であらう。



△菅健次郎君。明治二十八年滋賀縣水口

町の生れ、大正十年東大法科を卒業し在學中柔道の講師をしてゐた鐵道省に這入つて鐵道

の現業を見習つたが、十二年鐵道省事務官に任せられ鐵道局副參事から在外研究員と

して米國に渡つて自動車運輸の事を研究し歸朝後運輸局總務課に在つて例の省營自動車のことを擔任されてゐる。

氏は體軀堂々二十四貫、身長五尺七寸もある程の大男だ、夫れに柔道六段と言ふから直接行動の流行する今日此頃でも從業員の五六百を相手にするのは平氣であらう。併し眞に強い者は餘り強がらないで弱い者を眞似ると見え、氏も亦盆栽を弄つたり小鳥を飼つたりする趣味があるそうだ。

本誌の爲に自動車交通から見た道路論を寄せられてゐる、其の所論に對しては隨分議論もあるそうで、路政僑君などが反對論を書いてゐるそうだから今は彼是れ言はないが、路政を論ずるに方つて其の關係者ばかりが所論してゐても、我が田に水を引くやうなもので餘り感心しない、菅君が鐵道の見地からして路政を論ぜられたのに對し筆者は深甚の敬意を表すると共に此種の論客が澤山現はれむことを切望する。